

B 164 明治、大正、昭和前期の学童の衣生活とその背景(第3報)
文教大教育 松田歌子 ○伊地知美知子 高島 豊
山口芸術短大 藤村代利子

目的 第3報は群馬県前橋市の学童の衣生活について調査を行う。前橋市は県の中央よりやや南部に位置し城下町であった。江戸末期は上州の繭、生糸の集散地として栄え、明治以後は製糸の町として発展した。製糸業の最盛期の1919年(大正8年)には50近い機織工場があった。このような背景での明治から昭和初期までの学童の衣生活の推移を調べる。

方法 前橋市内の100年以上の歴史を持つ小学校を対象に、百年史、卒業写真、その他の写真、聞き取り等をもとに衣生活の変遷及びその周辺を調査する。

結果

- 大正末期までは殆ど筒袖の着物に女児帯、藁草履又は下駄で、風呂敷に学用品を包んでおしを肩から斜めに掛けて通学した。
- 大正初期には丈長を用いて髪を結っていた。
- 洋服への移行の過程であろうが、大正末期にはエアロン姿が目立った。
- ほぼ全員洋服になったのは昭和14年頃であった。